

平成27年7月15日(水)

老球の細道146

元東京五輪代表、江川嘉孝さんを囲んで

会津バスケットボール協会 室井 富仁

今から50年前第18回東京オリンピックが開催された。この時バスケットボールにおいて日本男子代表選手12名の中に会津坂下出身の江川嘉孝さんがいたことを知っている人は現在何人いるだろうか。

2020年にも再度東京でオリンピックが開催される。これから第2、第3の江川選手を会津坂下町、いや会津地区から輩出させようと、坂下ミニバスケットボールチーム代表の鈴木新氏と二瓶誠二氏が、わざわざ東京から江川さんを招聘し「江川さんを囲む会(7月11日)」を企画した。翌日の12日(日)には会津地区のミニバスケットチームの子ども達と指導者に坂下東小学校において講演会と技術指導が行われた。

会津坂下町で行われた「囲む会」にはミニバス関係者だけではなく、坂下町町長、教育長、会津バスケット協会松井会長なども参加していただき、バスケットボールはもちろんのこと、スポーツを通じて町おこしの話題などでも盛り上がった。

江川さんは会津高校時代にオリンピック選手になりたいという夢を抱くようになり、高校を中退して単身上京し叔母さんの家に住み込んだ。当時日本のトップチーム中央大学附属杉並高校に自分で電話をかけて入学をお願いしたという。たまたま電話に出たのが当時の杉並の監督であり、高校バスケットボール界の名将野口政勝先生だったことから入学までスムーズに運んだ。運命とはこのようなことを言うのだろうか。

中央大学附属杉並高校に江川さんが入学してから同校は3年連続インターハイ全国優勝を果たす。その後明治大学に入学し、全日本大学選手権優勝を2度達成。大学3年次に東京五輪代表選手になり、とうとう自分の夢を実現させた。大学卒業後は八幡製鉄に入社し、日本リーグ(現在のNBL)で得点王、MVP、ベスト5など何度も受賞し、名実共に日本NO1のスーパースターとなった。コーチとしても第20回モントリオールオリンピックでは日本男子代表のコーチを務めている。まさに会津ドリーム。

このようなサクセス・ストーリーを残した江川さんは、幼少の頃から能力や環境に恵まれた神童だったのかということではなかった。早熟した果実は早く地面に落ち大器は晩成する。幼少期にはすでに両親を亡くし、小学校の時は「結核」を患い、運動もろくにできない環境で育ったことを今回初めて知った。そのような環境で育った人がなぜオリンピックへの夢を抱いたのか。

お父さんは江川さんが1歳の時に戦争で亡くなられた。元来陸上、相撲と卓越した体格をもったアスリートであった。亡くなったお父さんの日記の中に「オリンピック選手になりたい」という父の夢に出会い、「父の代わりに自分がバスケットボールでオリンピックに出る」という夢を抱くようになったということだった。思わず涙が頬を伝った。

話をしている中で、江川さんの明るく、礼儀正しく、謙虚な人柄に感銘を受けた。明治大学時代の監督が江川さんを評する。

「一つのことには打ち込んだら、どんな小さなことでもおろそかにしない性格」。

大きな夢を抱かず、普通で満足し、とことん努力することがお伽話になってきている。今、江川さんの話、エピソードは参加した子ども達、大人にも熱い刺激を与えてくれた。